



“遊びの伝道師”
が行く!

ACP

チャイルド
アクティブ
プログラム
クリニック

監修: 佐藤善人
(岐阜聖徳学園大学教育学部准教授)



◀岐阜聖徳学園大学附属小学校での「遊び塾」は、生活科の授業に訪れ生徒とともに遊ぶというもの。大学生が主導する授業で、佐藤先生も子どもにまじってノリノリ!

旅の“序章”は 伝道師の原点『遊び塾』を訪問!

昨年度は、1年間の追跡ドキュメントによって、遊びがもたらすパワーを示してくれた佐藤先生。そして本年度は、先生が日本各地のスポーツ少年団を訪ね、それぞれの活動に合わせた遊び方を伝授する新企画! 第1回は特別編、先生の原点となる『遊び塾』を訪ねた。



▲この日のリーダー内藤さん。「ルールを守ってね。じゃないと遊ぶ時間が減るからね」と、子どもたちにわかりやすく、簡潔に、そして笑いも入れるのが内藤さん流

本誌のアクティブ・チャイルド・プログラム(ACP)普及企画2年目のプロジェクトは、同制作メンバーの一人、佐藤善人先生による『ACPクリニック』だ。

元氣な子どもを育むための取り組みの一環で、子どもたちが、楽しみながら、積極的に、体を動かす指導法として、ACPが制作された。そのACPにおいて、子どもたちの興味を引き、継続性の高い遊び(運動遊び/伝承遊び)は重要なアプローチである。愛知・東山スポーツ少年団(剣道)の1年間のドキュメントで明らかだったように、「遊び」の導入によって年齢や性別、剣道の技能の壁を超えたコミュニケーション能力が向上したり、時間の使い方にメリハリが出たり、そして剣道自体の上達につながったりと、ACPのもたらす恩恵は幅広い。

小学校教諭の経験をもち、前回の連載でも子どもたちの心をわしづかみにした「遊びの伝道師」佐藤先生は、ACPの基本理念の普及とともに、子どもの育成に関わる集団それぞれの特性や課題に応じた活用法とともに探り、達成への筋道を考える。

企画第1弾の今回は、佐藤先生自身が4年前にスタートさせた『遊び塾』の事例を取り上げたい。

これは、岐阜聖徳学園大学教育学部連携のプログラムで、体育専修・佐藤ゼミを中心とした学生が小学生の子どもたちに「遊び」を指導する、という活動だ。

『遊び塾』の誕生秘話

きっかけは、旧知の岐阜県・安八町立結小学校の校長先生から佐藤先生に持ちかけられた、こんな依頼。

「子どもたちが休み時間に行うのは、サッカーやキックベースのような運動ばかり。みんなで楽しむ遊び、を知らないと思う。これではさまざまな体力要素が身につかない。ぜひ子どもたちに遊び方を教えてもらえないか」

これを受けて佐藤先生は学生たちによる『遊び塾』を企画した。当初は佐藤ゼミの2~3人で始まったが、いまでは延べ30名ほどの学生が参加。佐藤先生は「遊び」は単なる「遊び」ではなく、遊びながら「目的」を達成できるようにルールを工夫し、安全も守られるようプログラムすることが重要であると学生たちに認識させ、まずは佐藤先生自身が「実演」。あとは学生たちが主導する。

結小学校では冬の1月から3月にかけて毎週水曜日、45分間のロング昼休みを利用して、低・中学



「キャッチ」

1. 右手がおにぎり、左手はお皿。
最初に隣の子のお皿(左手)に自分のおにぎり(右手)を乗せておく。
2. リーダーの「キャッチ！」というかけ声で、
自分のお皿(左手)で隣の子のおにぎり(右手)をつかみ、
自分のおにぎり(右手)はつかまれないように隣の子のお皿(左手)から離す。
3. 隣の子のおにぎりをキャッチして、
自分のおにぎりはキャッチされなければ、勝ち。
4. リーダーは「キャッチ！」だけでなく、
「キャベツ！」や「キャラメル！」という言葉でフェイントを入れる。



▲「キャベツ！」とフェイントをかけられたときに、おにぎりをキャッチしたらダメだよ～

◀大学2年生の鈴木さんは「まだ実践はしたことがありませんが、先輩方のやり方からたくさんを学んでいます」



▲担任の小木曾先生が「検定」制度をつくって子どもたちを楽しませているお手玉、けん玉、コマ

アクティブ・チャイルド・プログラムの内容については、日本体育協会のホームページからご覧になれます。

→ <http://www.japan-sports.or.jp/> (トップページ右側「PICK UP」内のバナーをクリックしてください)

■ 同プログラムについては、コーチング・クリニック誌 (ベースボール・マガジン社刊) でも連載中です。

普段の授業では見られない子どもたちの素の部分がある…

「生活科」とは、平成元年に告示された小学校学習指導要領で新たに設けられた教科。その学習内容の一つが、自然を味わうことや、遊びを工夫し楽しむことだ。時代の急速な流れのなかで生活の場から消えていったコマ回し、凧揚げ、お手玉といった伝承遊びを、平成の子どもたちは生活科の学習として親しむようになっていく。そこへ、学生たちが一役買うのだ。

同附属小学校1年2組で行われたある日の『遊び塾』に同行した教室の棚に置かれたカゴのなかには、昔ながらのけん玉やコマ、お手玉が整然と収められている。「技の検定をつくってるんです。子どもたち、上手ですよ」と、担任の小木曾美幸先生。

1に、2年生の中西悠介さんと鈴木亜花菜さん。子どもたちは大歓声を上げて3人を歓迎すると、小木曾先生の指示で素早く学習机とイスを教室の片側に寄せ、遊ぶためのスペースを空けた。

「はい、今日、お兄さんとやる遊びは『キャッチ』といます。じゃあまず、みんなで一つの輪をつくってください。よく通る内藤さんの声に従って、子どもたちは大きな輪になった。

「みんなの右手はおにぎりです。左手は、お皿。隣の人のお皿の上におにぎりを置いて」と、内藤さんのルール説明が続く。子どもたちの心を引きつけ、理解しやすい言葉を選んでるのが、よくわかる。

「学生さんたちは子どもたちとの接し方が上手。子どもたちは学生さんと触れあって、知らない遊びを教えてもらって楽しそう。普段の授業では見られない素の部分が出てくるなと思います」と、教員歴10年の小木曾先生は話す。

子どもたちを飽きさせず、テンポよく2単位時間(90分)のセッションを行うために、学生たちは遊びの選択から説明のシミュレーション、どこで盛り上げるかなど思案を重ねて、この時間に臨んでいるのだ。

遊び
2

「リーダーは誰だ」

1. オニを教室の外で待たせ、メンバーからリーダーを1人決めて、それが誰かわからないように一つの輪になる。
2. オニが輪の中に入る。リーダーが何かの動作をして、全員がリーダーのマネをする。
[例]リーダーが右手で頭をなでたら、みんなも右手で頭をなでる。
3. リーダーは、オニが見ていないスキに動作を変え、また全員がマネをする。オニはみんなを見回してリーダーを当てたら終了。
4. メンバーたちは、オニに誰がリーダーかがばれないように気をつける。オニは、みんなの目の動きにも注目！
5. 難しかったら、オニを2人にしてもいい。



▼この日はほかにも簡単な遊びを実施。子どもたちの楽しそうな顔がまぶしい！



中西さん



鈴木さん



戸倉さん



内藤さん



山口さん

異世代交流にも、次代を担う人材育成にも一役！

結小学校を担当した山口沙季さんは「結小では、途中からどの学年も参加できるようにするんです。学年によっては仲のいい子同士が固まる傾向があって、静かにさせるのも一苦労。進行に工夫が必要ですよ」と、環境や状況によって対応を変える必要性を実感している。結小のリーダー戸倉有紀さんは遊びを選ぶ際、「どうしたら子どもたちの運動量が増えて、私たち

「2年生のころ、教育実習も修了している先輩方の遊び塾を見て学んだのは、まずルールを徹底させること。なぜルールを守るか、それは遊ぶ時間をできるだけ長くするため、つまり自分たちのためとということを理解させるのが大事」というのは内藤さん。遊びのルールを子どもたちに伝えるなかにも笑いを取り入れ、興味をそらすないう工夫をしている。来年度から実際に子どもたちの前に立つことになる鈴木さんは、内藤さんがいう「ルール」に注目している。「簡単に伝えることも重要。そして、簡単なルールなら子どもたちだけでも行いやすい。そこも大事だと思います」

これは、いまや日常的には難しくなった異世代交流の場でもある。児童の心身の成長だけでなく、教職を志す学生たちにも大きなメリットをもたらしながら代々受け継がれていく『遊び塾』。草の根で、確実に、次代を担う人材が育っている。佐藤先生が考えたいのはそんな地に足のついた活動。遊びの伝道師は本年度、子どもたちの健康な心身の育成に心を砕く現場の指導者の声に耳を傾け、ACPの最適なアレンジを探る旅に出る。

活動の中心となるのは大学3年生。2年生たちは、遊びに加わり、児童の誘導などを手伝いながら、先輩たちが行うセッションを見て、自分たちが主導するときのイメージをふくらませるのだ。この日、附属小学校での遊びを教えたことを今後も継続してやってくれる遊びであるか」をポイントにしているという。この日、附属小学校での遊びを担当した中西さんは、以前先輩が行った『リーダーは誰だ』を選んだ。「1年生なので一度やったものはやりやすいと思いました。先輩の指導実践を見たときに、盛り上がっている子どもたちの注目を引くコツとして、あえて小さな声で語りかける、というのを試してみました」。



子どもを ランニング好きにするには

佐藤先生の
ワンポイントコラム



さとう・よしひと

1972年、神奈川県生まれ。鹿児島大学卒業、東京学芸大学大学院修了。岐阜聖徳学園大学教育学部准教授。岐阜県内の小学校や中学校の教諭、東京学芸大学附属大泉小学校教諭を経て現職。専門は体育教育学。日本全国で体育・保健体育の授業を参観して授業づくりに関わり、子どもと運動とのよりよい関係づくりを目指す。

空前のランニングブームのなか、私も先日、京都マラソンを走りまして、わずかながら自己ベストを更新しました。とはいえ妻には負けっぱなし。今回こそはと思ったのですが、ゴールしてみるとやはり妻はすでにそこにいました。

私のような市民ランナーの数は、ここ数年で爆発的に増えたように思えます。笹川スポーツ財団の調べでは、10代のジョギング・ランニング実施率は、10年前の7.8%から2011年には17%まで上昇。確かに私が勤める大学の学生からも、「マラソンを走ってみたい」という声が増えています。

ランニングブームの一方で、 子どもは「走るのがキライ」

しかし、こんな傾向が一過性のブームに終わるのではないかと私は心配でなりません。いまの子どもたちの多くは「走るのがキライ」なのです。

先行研究によると、小学校低学年・中学年はまだいいのですが、5年生を過ぎると走ることへの好意的態度がガクッと落ちます。中学生になるとその傾向はさらに悪化。つまり、「学年が上がるほど走ることに積極的でなくなる」という傾向が見えます。義務教育の体育授業の内容が改善されなければ、若者たちは走ることに嫌いに

なる一方ではないか、と思えてなりません。

そもそも小学校や中学校の先生自身、走ることに高い関心は少ないように感じます。私の知る同業者に市民ランナーは少なく、研究授業のテーマにも球技や器械体操、陸上競技のハードル走などはあっても、長距離のランニングを取り上げる人はほぼ皆無。このような状況も、小学生・中学生を走ることに消極的になってしまう一因なのかもしれません。

では、この子どもたちがどんどん走ることを嫌いになっていくのはなぜか、その傾向を食い止める授業はどのようなものか、について考えてみたいと思います。

ランニングの楽しさ、 上達の喜びを 感じられる授業を

義務教育の学習指導要領解説体育（保健体育）編では、ランニングを下記のとおり位置づけ、学習内容を定めています。

- 小学校低学年→体を移動する運動遊び→無理のない速さでの〴〵かけ足、2～3分
- 小学校中学年→体を移動する運動→無理のない速さでの〴〵かけ足、3～4分
- 小学校高学年→体力を高める運

動→5～6分程度の〴〵持久走、
●中学校1～2年→陸上競技の長距離走→自己のスピードを維持できるフォームで一定の距離を走り通し、タイムを縮めたり〴〵競走、ができる

つまり、小学校から中学校へ上がるといきなり「ゆっくりでいいよ」から「速く走れ」になる。この学習内容の差異に、子どもの気持ちがついていかないのだと思います。ただ楽しい〴〵かけ足、から〴〵持久走、となり、揚げ句には〴〵競走、になる。冬の寒いさなかに薄着で走らされ、学期の最後には校内マラソン大会で競走を強いられる。寒い、キツイ、抜かれてばかりでつまらない——ランニング嫌いになっても仕方ありません。

頑張るって走ること、距離やタイム、順位を他者と競わせるのではなく、評価をするなら他者との比較ではなく、授業中の取り組みによってその子にどれだけの伸びがあったかを見るべきではないかと思えます。

ランニング自体の楽しさ、昨日の自分よりも少しでも上達することの喜びを、子どもたちが感じられる授業を。一人のランニング愛好家として、教育者として、重要なミッションであると考えています。